
南桜高校野球部

屋下雨宿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

南桜高校野球部

【Nコード】

N6148Y

【作者名】

屋下雨宿

【あらすじ】

野球部モノのようなそうでないのような。

序、覚めない夢と情性の続き

俺には幼馴染がいた。隣の家に住むお幼馴染。母親同士が同級生で仲が良かったこともあり、幼い頃からよく一緒に遊んでいた。遊んでいたというか、なんというか。いつも手を引かれているのは俺の方で、毎度毎度、無理やり連れて行かれるような感じだった。でも、嫌ではなかったし相手の事も嫌いではなかった。

しかし、そんな時間も長くは続かない。

別に不慮の事故があったとか、突然の引っ越しとか、そんな悲劇めいたものがあつた訳ではない。

年齢は向こうが一つ上で、性別も違つたから。それだけの事で、それが全てだった。

歳を重ねるにつれて、お互い同年同性の友達と遊ぶようになって、一緒にいる時間は減っていく。当然、俺達の距離も開いていった。ごく自然で当たり前前の事だったと思う。

それでも、小学校の内は通学団が一緒だったので接点はあつた。しかし、中学生になるとそれすらなくなってしまふ。ただ隣に住んでいるだけ。全く会話もない他人のような状態になってしまうのだ。

四月のはじめ。今日は入学式。俺も気が付けば高校生になる。「身長も顔つきも子どもの頃とは全然違う」カメラで写真を取りながらとアルバムを見るという器用な技術を駆使する母親が今朝そんなことを言っていた。しかし、そんなこと言われてもピンとこないものである。

時間の流れとは確実に残酷なものだ。人間の主観や客観でそれを正確にとらえる事は難しい。

「凄く立派になった！よし、行ってこい！」

母親がバンバンと背中を叩く。とは言っても、俺が入った高校は地元の三流高校。凄くもなんともない。何もしなかった結果、なった高校生だ。全く立派だとは思えない。

ようやく母親に解放された俺は、肩苦しそうにネクタイを直した。制服は中学で着慣れた学ランではなく灰色っぽいブレザー。その胸ポケット辺りに、鳥が羽を広げているような校章が縫いつけられている。

私立西桜高等学校。

俺が入学する高校の名だ。

その立地は最悪で、畑の真ん中にポツリと立てられている田舎臭い高校だ。周囲には、本当に何の建物もないので、すぐく目立つがそれ以上に物足りない。

まあ、その分だけグラウンドは広い。それでも、運動部が強いよ。うな話は聞いたことはないのだが。

入学式ということもあつてか、正門では上級生や先生が新入生を迎え入れている姿が見える。その門の前では、パンプレットを配る業者のお姉さんがいた。これも何処にでもある光景だろう。

しかし、何か足りない気がする。

俺は校内の駐輪場に自転車を止めて考え込んでいた。

ああ、そうだ。あの木が足りない。校内にも周辺にも桜の木が見当たらないのだ。学校名に『桜』なんて付いている訳だし、一本もないという事はないだろう。時計を見る。まだ時間もあるので探しに戻ってみようか。僕はUターンをしてきた道に戻る。

あつた。

それは案外あっさり見つかった。正門を超えてすぐの左側。校舎側と言った方がいいのだろうか？芝を敷きつめ中庭のようになった場所のとなりポツリと植樹されている。それも、たった一本だけ。俺と同じ今年の入学生だろう。桜の下にたむろして、写真を取り会っている学生の姿は少なくはない。しかし、一本の木に群がる新入生というのも惨めなものだ。

暇をつぶした結果、余計に虚しくなつたし、この学校にもちよつとだけ失望した。

代わる代わる桜の下に滑り込む学生達を横目で見ながら、校舎へ向かう。その入り口、昇降口には「クラス編成」と大きく書かれた紙が張り出されている。これを確認してから中に入る訳だが、やはりここにも学生の群れ。その集団の最後尾からでは、自分の名前を探するのは困難だ。しかし、この人混みを抜けなければ先に進めない

と思うと気が滅入る。

仕方ないので、しばらく後ろで待つことにした。そこら辺にいる人の顔を遠巻きに覗いてみるが、知っている奴はいない。当然と言えば当然か。中学校の校区から南桜高校までは自転車で五十分ぐらいの距離があり、もっと近くていい高校はいくらでもある。俺みたいに成績が悪くない限り、そちらを選ぶのが普通だろう。

それでも、見知った顔は全くない訳ではない。俺みたいな成績の悪い奴がいた筈だが、今のところは一人も見えていない。とりあえず、話し掛けてくるような仲のいい奴がいないので、こちらから探す気もないのだが。

人が減ってきたところ強引に割り込んでクラスを確認。そしたら、さっさと中に入る。

ようやく、校舎に入る事が出来た。

下駄箱は木製で所々欠けていたり、角がすり減って丸くなったり。どうやらかなりの年季物のようだった。そこで学校指定のスリッパに履き替える。廊下一面ワックス掛けでもしたのだろう、古く臭い校舎の中で廊下だけが無駄に輝いていた。そして、教室へ。もう大半の生徒が席についていたので、俺も自分の席を探してさっさと座ることにした。

やがてチャイムが鳴り、担任が教室に入ってきて来る。

今のところ面白い事は何も無い。今日一日はこんな感じだろう。いや、明日も明後日もそうかもしれない。大体、ここは何の目的もない中学の延長だ。名前が高校に変わっただけで情性な事に変わらない。

今はまだ、そう思いながら肘を付いているだけだった。

2、隣人との強制的な再会方法

桜の季節も終わった。新しい学校、新しいクラス、それにもようやく馴染んできたと感じる四月の終わり頃。

それは突然訪れた。

基本的に何事にもやる気を出さない俺は、当然ながら部活はせずに帰宅部を選択。その日の終礼が終わると真っ先にクラスを出てとつとと帰る。

自転車に跨り風の強い畑道を抜けると、やや新しめの一軒家が立ち並ぶ住宅地へ。その中央付近にある自宅へと真っ直ぐに向かつて行く。自動車一台がやっと通れるぐらい細い道。その突き当りのT字路。ここを右に曲がれば家が見えてくるだろう。その角を曲がったところで、俺はある事に気付き自転車を止めて足を付いた。

誰がいる？

そう、自宅の前に誰かが立っていたのだ。

よく目を凝らしてみる。そこには、南桜の制服を着た見覚えのない女子の生徒が立っていた。何故か腕を組み仁王立ちをしている。何故、堂々と人の家の前に立っているのだろうか。同じ高校生という事で知り合いの可能性を考えてみるが思い当たる節はない。うーむ、不審だ。

どちら様でしょうか？などと声を掛けてみようかと考えたりもし

だが、やっぱり思い止まる。

それは制服のリボンの色に気付いたからだ。南桜高校では、学年によってリボンの色が変わる。男子だとネクタイの色だ。一年が赤系、二年が黄色系、三年がオレンジ系の色である。自宅の前に立っている不審者のリボンは黄色。よって二年生だ。上級生ともなると益々接点はなくなる訳でして。

しかし、このまま通り過ぎる訳にもいかない。それでは、一生家に帰れなくなってしまう。その場で自転車に跨ったまま考え込んでいると、向こうがこちらに気付いて歩いてきた。その距離約五十センチ。手を伸ばしてもギリギリとどかないぐらいだろうか？そこからジロジロと見上げるように俺の顔を覗きこんでから一言。

「葛原 幸基？」

ああ。そうだ。それは間違いなく俺の名前だった。

俺は少女の問いに答える前に、目の前の少女をよく観察する。身長は俺より頭一個分低いぐらい、多分百六十センチ前後だろう。活発そうな真っ黒の黒髪ショートで、自信がありそうなやや釣りあがった目。体育系だろう足が長くスカートからのぞく太もももなかなか立派である。多分、校内でも魅力的で高レベルな部類だろう。だけど、この少女に見覚えはなかった。

「そうだけど。アンタは？」

特に言葉を選びもせず聞き返すと、何故かムスツとした表情をして更に詰め寄って来る。

「蓑島 有紀よ」

それは隣の家に住んでいる俺の幼馴染の名前だった。

言われてみればこんな感じだった気もする。口煩くて、キツイイメージ。小学校の時のイメージだが、今でもしっくりくる感じた。改めて見澄ますと、素直にあまり変わってないなと思えてくる。

「知らないとは言わせないからねっ！」

「思い出した。思い出したから」

俺が何も返さずに考え込んでいると、有紀の方からすごい剣幕で顔を突き出してきた。思わず両手を前に突き出して数歩分の距離を保ち自衛する。

「思い出した？つまり、忘れてたど？言われるまで気付かなかったと？」

俺の一言で更に機嫌を損ねてしまったようである。一步、二歩とどっしりとした足取りで更に歩み寄って来る。自転車に跨ったままの俺には逃げる手段はない。こういうときは早めに話題をすり替えるに限る。

「そ、それよりどうしたんだよ、こんなところに立って。何か用でもあるんじゃないのか？」

「そうだったわ。幸基に用があったの」

「どんなだ？」

「私と勝負しなさい！」

俺を指差しながらいきなり訳の分からない事を言い出した。当然、

俺は眉をひそめて口元を歪め、今の気持ちを率直に表現していたが、その抗議が受け入れられる事はなかった。

*

大きめのこたつ机を中央に置き、北西にソファアを『く』の字に配置し、TVを南東に据えた洋室の居間。俺達、俺と有紀はそこでテレビを見ていた。

有紀が俺の家に来るのは何年振りだろうか？小学校の頃は結構頻繁だった気がするが、いつが最後だったのかはハッキリと憶えていないし、思い出せない。特別仲が良かった訳でもないし、覚えていないのが普通だろうか。

「あらあら、久しぶりねー。元気にしてた？有紀ちゃん」

「冬子さん、お邪魔してます」

冬子とは俺の母親の名前だ。

母が挨拶しながらお茶を出す。それに合わせて有紀は頭を下げた。母は今もよく有紀の家、蓑島家でだべっていることが多いので、有紀とも頻繁に会っているらしい。

有紀が家に来る事も実は珍しくなかったりするのだろうか？

「まだ、家のユキと遊んでくれてるなんて知らなかったわ。こいつは何も教えてくれないし」

「今日はたまたまです」

たまたま？人の首根っこを捕まえて無理やり入って来た人間の言う台詞とは思えない。

『激熱奮迅！ベースボールナイター！』

TVから掛け声とともに一際大きな音楽が流れ始める。CMが終わり始まった番組は野球中継だった。

「きたきたあああああつ！さて、始めるわよ！」

アナウンサーの熱い実況など余裕でかき消す有紀の音量。突然、耳元で声を上げられると頭痛がするような感じがして、俺は上半身だけ大げさに逃がした。

「始めるって、何を？」

「勝負よ！」

「だから何のさ？」

「何対何でどっちが勝つか賭けるの。それで近かった方が勝ち。点数よりも勝敗優先ね」

「わかったよ」

早口で一回言われたただだが、案外スルっと何そするのか？そのルールは何なのかを飲みこむ事が出来た。

「懐かしいわね。私も参加しようかしら」

母もそれに割り込んでくる。

「いいですよ」

「懐かしいって？」

「あら、忘れたの？昔はお父さんとユキと有紀ちゃんできよくやっ
たじゃない」

「ふーん」

そんなことを言われても全く思い出せなかったが、とりあえず相
槌だけいれておく。

試合は地元のA球団と関西のB球団の試合。野球のルールぐらい
は知っているが、野球中継なんてロクに見ていないのでどちらが強
いのか皆目見当もつかなかった。

思い付きの適当で数字を紙に書く。紙に書く理由は、後でいい分
を変えない為の証拠としてだ。

「決めた？」

「うん」

「私も決めたわ」

掛け声に合わせて一斉に公開。

幸基	3	-	1
有紀	0	-	7
母	1	-	0

左側が地元A球団である。有紀は内容を確認しながら自信満々そ
うな笑みを浮かべながらに紙を回収していった。

*

「まだゼロゼロか」

ソファーに寝転がってマンガ雑誌のページを捲っていた俺は、横目でTVを見てつぶやいた。TVのポリウムを俺が下げたままだった為に、すっかり意識しないと部屋の隅、俺のいるソファーまで聞こえてこない。

有紀と母はTVの前に座ってTVを見ながら何を話している。どうやら、俺の存在など完全に忘れているようだ。

「エース対決だし仕方ないね」

こっちを向いて母が答える。一応、聞こえていたらしい。

「ふーん、俺でもこれよりマシ思っけどな」

画面の向こうで、タイミングを完全に外されたスイングで無様な三振をする打者を見てからつぶやいた。そんな親父臭いトークに有紀も加わってくる。

「幸基はまだ野球やってるの?」

「小学生までだけど」

「それじゃ無理ね」

「やってた!そういえば、やってわね!」

子どもの昔話には異様な喰いつきを見せるの母親の性だろうか?俺からしてみれば嫌な予感しかしないし、出来ればそこはスルリと流してほしいものなのだが。

「確かこのアルバムにたくさん……」

いつ、どこから取り出したのか？カーペットの下にでも隠してあったのか？

気が付いた時には、母の右手にアルバムが握られていた。誰が見ても新手的マジックだと、驚きの声を上げるだろう。

「そんなもの持ってくるな！」

慌ててソファーから飛び出して、アルバムを開く前にそれを取り上げる。

「え〜」

「片付けてくるからな！」

「有紀ちゃんも見たいって言ってるし、一緒に見ようよー」

「え？私はどつちでも……」

などという会話には聞く耳を持たずに、アルバムを持って書斎へ向かう。そのアルバムのネームテープを確認。『幸基八巻』と書かれている。アルバムを順番になるように戻す。それから、並べられたアルバムを改めて見てから溜め息を付く。俺のアルバムは現在全部で十二巻。集めれば円卓でも囲ってしまう数字になっていた。更に、家は3人兄弟で合計すると三十冊ものアルバムが並べられている。本棚二列分を占拠しているのだ。これだけあると、もちろん家族兄弟の写真だけでなく、友達と写っている写真も多い。枚数を数えた事はないが、有紀の写真もたくさんあったはずだ。

「馬鹿馬鹿しい」

仕舞ったばかりアルバムをもう一度取り出そうとするが、結局、辞めて部屋を出た。

「で、母さん。今日の飯は？」

「えーとねえ。冷蔵庫にハンバーグがあるから、焼いて食べてもいいよ」

「うーい」

俺は居間に戻って来てもソファーに居着かず、またすぐに部屋を出た。

別に腹が減っていたとか、ご飯が食べたかった訳ではない。有紀がいるからだろうか？居間にいると何だか落ち着かなかったのだ。だから、離れて漫画を読んだりもしたし、今も逃げ出すように部屋を出て行く。

それで、俺は何をやっているのだろうか？

そんなものは見ての通りである。俺はキッチンでキャベツ、人参、ピーマン、ウインナーなどをフライパンで炒めていた。所謂、夕食の準備と言う奴だ。母親にやれと言われた訳でもないし、普段からやっている訳でもない。

塩コショウと醤油、それにオイスターソースを少しだけ。シンプルな味付けである。

もういいかと思いい火を止める。それを一先ず大皿へ移すと、冷蔵庫からハンバーグを取り出して焼く。白飯の準備は母が済ませていたみたいなので、これで完成でいいだろう。

水切り付きの食器用プラケースを持って居間へ戻る。それから、料理や炊飯器を運んだ。

「ご飯出来たよー！」

母親が叫ぶと間もなく弟と妹が居間に駆け込んでくる。「お、ハンバーグじゃん。母さん分かってるねえ」「私、魚が食べたいって言ったんだけど」などなど晩飯の内容に感想を述べながら席に着く。母はそれを軽く受け流しながら、皿に取り分けていく。

てか、誰も有紀には突っ込まないんだな。ちゃっかり、茶碗まで受け取ってるし。しかもそれ俺の茶碗なんですけど。

手際良く準備を済ませて、こたつ机の一人ずつ座る。机は正方形で角は4つ。ここにいるのは、俺、有紀、母、弟、妹の五人。一人座れない訳で、俺がソファアの上に溢れていた。いや、まずはそれよりも……

「なあ、俺の食器がないんだけど」

「棚にお父さんのがあるから持って来なさい」

「はいはい」

「ちょ、ちょっと待って！これが、もしかしてこの茶碗……」

立ち上がる俺を有紀が引っ張った。もう片方の手に握られているのは、先程も言ったように俺の茶碗だ。

「俺のだけど」

「か、返すわ！って言うか、私、家でご飯食べないといけないし！そろそろ帰らないと怒られるし！」

有紀は何を思ったのか顔を伏せて茶碗をぐいぐいと押しつけてくる。中身が入ってるんだから、そんなことしたら危ないだろうに。

「じゃあねー！」

俺が茶碗を受け取ると、有紀は一目散に部屋から出て行ってしま
うのだった。

母はニヤニヤとした表情で何故か無駄に幸せそうだった。妹は「
ばいばーい」と手を振っていた。弟は我関せずと言った感じでご飯
を食べ始めていた。

*

翌日。学校が終わり家に帰ると、何故かそこにいた。

何がかつて？そんな事は言わなくてもわかるだろう。有紀である。

「おかえり」

「……ただいま」

「何よ？今の間は。私が居たらいけないって言うの？」

「別にそう言う訳じゃないけど」

居間のソファアのどっかりと座りこんでいる有紀に対して、全く
文句がない訳じゃないが、言っても面倒な事になるだけな気がする
のでここは黙っておく。

「昨日賭けの事話があるんだって」

奥からお菓子の袋を抱えて母が出てきた。それを机に広げると「
どれがいい？」などという感じで有紀に選ぶに促していた。それに
応えるように有紀は四袋ぐらい摘まみ取る。

おいおい。自分で言うのも何だが、人様の家だぞ？一袋にしとけ
よ。つーかそれ、俺の買ってきた奴なんですけど。

「あ？ユキも食べる？」

「いらね。それより話って何だよ？」

「そうそう、昨日の賭け私が勝ったでしょ？だから私の言う事一つ聞いてもらおうからね」

「は？」

そう言えば、野球ってどうなったんだっけ？最後まで見てないというか中継が終わったので……。いや、それよりも「言う事を聞く」とか小学生の約束かよと言いたいのだが。

「は？じゃないわよ。昔からそうだったでしょ？」

「文句なんか言わずに、女の子のお願いの一つぐらい聞いてあげなさいよ。そんなことだからいつまで経っても彼女が出来ないのよ」

母も打ち合わせでもしてあったかのように有紀の味方をする。

「分かったから、言ってみるよ」

ここで文句を言っても形成が悪くなるだけである事を理解し、半場諦めた様に言い放つ。

それ聞いた有紀は満足気にソファーから立ち上がると俺の前に立つ、そして蛍光灯目掛けて指を一本付き立てた。

「甲子園目指すわよ！」

甲子園？昨日までの展開から察するに野球の事だろうか。顔をしかめる俺の隣で「あらいいわね」となど言いながら手を叩く母親の姿はわざとらしい。

「まあ、いいけどさ。野球部ぐらい……」
「え？」

目を丸くして、鳩が豆鉄砲を喰らったように目を丸くして驚いた顔をしている。それでも、微かに売るんだその瞳は真っ直ぐに俺の方を見つめていた。

「何でそんなに驚くんだよ？」

と思っていたら母まで同じような顔をしていた。お前らは俺がどんな反応すると思っていたんだよ？

3、 野球部なんて、なかった

放課後。

校舎を出て駐輪場に向かう前に必ず通過しなければならない下駄箱。俺はそこで有紀に捕まった。クラスの中では真っ先に出てきたはずなのに、どうして待ち伏せなどできるのだろうか？

「逃げる気だったでしょ？」

お見通しだと言わんばかりに鼻を鳴らす。そのまま有紀に連れられて部活棟へ向かうことになった。

校舎を出たら正門とは逆の方向へ。その突き当りにあるプレハブの二階建て。そこが部活棟だ。先を歩く有紀は一階一番奥の扉まで行くとその扉に鍵を挿す。しかしそのとびらには、部活名の書かれた看板が掛けられていなかった。隣は『陸上部』。その向こうは『テニス部』と言った感じの一目でわかる看板が取り付けられていたが、ここにはそれがなかったのだ。

これは、どういうことだろうか？

何か怪しい感じがするなあなんて思考を巡らせていると、俺は決定的な事実を思い出してしまう。

そう。あれは、新入生歓迎会の話。

体育館に集まり舞台の上上がった先輩達の興味のない話を聞かされた後の事。続けて部活動の紹介・勧誘が行われた時だった。同じように舞台の上に各部活の代表が二、三人ずつ出てきて、活動内

容とかどんな人に来てほしいとかそんな感じの有触れた勧誘活動をこなしていく。俺はあまり聞いていなかったが、それが終わった後に隣の奴が「野球部ないんだな」なんて話し掛けてきた事があったのだ。その後配られた部活一覧のパンフレットにも、野球部はなかったはずである。

結局、俺の辿り着いた結論はこれだった。

この高校に野球部なんてないんじゃないのか？

鍵を開けて中に入って行こうとする有紀に、少し遠回しに疑問を投げ掛けてみる事にする。

「部員いるの？この部活」

「いるじゃない。ここに」

つまり、私がそうです。といたいのだろう。これでは何もわからない。ちよつと遠回しが過ぎたか？仕方ないので続けて別の質問をする。

「ピッチャーってどんな奴なの？」

「あー。その内来るでしょ」

やはりハッキリとした応えはかえってこない。更に続けて部員の人数を聞いたが、それまでぼやかされてしまった。そうこうしている間に俺の思考は段々おかしな方向へ暴走をはじめていた。

おいおい。これはもしかして、有紀一人だけの怪しいサークルとか言うんじゃないだろうな？宗教とか占いとかがUFOとかそんなものは勘弁だぞ？いや待てよ。母もグルだったよな？これは旅行部とか言い出しかねない。これはありえる。しかし、そうなら約束

が違っじゃねえか。ここはビシツといってやるべきだろう。うん。俺は悪くない。悪いのはお前らだ。

そんな思考の果てに俺は覚悟を決めて口を開いた。

「もしかして、もしかしてだな……」

「うん？」

「野球部なんてないんじゃないのか？」

「だからあるって」

「しかも、お前以外に部員いないんだろ！？」

「ん？」

「いないんだろ！やっぱりおかしいと思ってたんだ！新入生歓迎会の時も、部活棟のネームプレート見ても、野球部なんて名前はなかったじゃないか！？」

「あー、それはだね……」

有紀はトーンを下げて片手を上げて小さく手を振っていた。俺に落ち付けとでも言いたいのだろうか？だが、ここで引く訳にはいかない。

「俺は昨日から気付いていたぞ！野球部がない事を知っていてこの話を承諾したんだからな！本当の目的は何だ？やはり母はグルだったのか？はやく言え！さもなければ……ぶへっ！」

本気で殴られたみたいだ。わりとマジで痛かった。話の途中だったから舌も嚙んだし、余計に痛い。

「落ち着いて、後ろを向け！」

有紀の指の動きにつられて口元を押さえながら振り返る。そこに

は、眼鏡を掛けた男子学生の顔が目の前にあった。

「うわっ！」

その学生はぴったりくっつくぐらいの真後ろにいたので、俺は驚いて飛び跳ねるように離れる。自分でも何で気付かなかったんだろうかと言いたくなるぐらいだ。それだけ、自分の思考に没頭していたのだろうか？そうは思いたくないが……

改めてその学生を見る。ブレザーの上からでも分かるぐらい体格の良くない感じ。それに、黄色のネクタイは二年の証。有紀の同級生だろう。

「こんにちは。今日は早いね」

「部長もはやいですね。この馬鹿がうるさくてごめんなさい。これでも一応。新入部員なんですけど……ほら」

有紀に押し出されるような形になり、軽く会釈を交えながら俺も挨拶をする。

「こんにちは」

部長と言っからは野球部の部長なのだろうか？どうやら、これは部員も部活も存在していたということだろうか？

「よろしく。新入部員くん」

笑顔で握手を要求されたのでそれに応じる。悪い人ではなさそうだけど、野球部と言う感じの手ではなかったし、運動部と言う感じの体格にも見えなかったのがちょっとだけ不安だった。

明かりもつけていない薄暗い部室。窓は小さく射し込む明かりは限られている。広さは二十畳以上あるのだろうか？意外と広いその部屋はまだ何も飾られていない真っ白な姿をさらしていた。

つまり、机や椅子、ロッカーなど部室にありそうな用具もここには存在しない。

唯一置かれている物と言えば、片隅に纏められた野球の道具だけ。こちらは、ボールからキャッチャーのプロテクターまで一通り揃っていた。

この一式を見て俺はようやくここが野球部だと認めた。慣れない問い掛けから答えを引っ張り出すより、こつやっつて中を確認した方がはやくかったのかもちょっとだけ後悔もする。

それから、ボールを手の中で転がしたり雑談をしたりしながら待つ事二十分。ようやく部員が集まったようで、部長が号令を掛ける。その後すぐに自己紹介が始まった。

もう一度、部室を見渡す。部室にいるメンバーは俺と有紀を含めて五人。

まずは部長の掛け谷 充。二年。眼鏡を掛けないと何も見えないほど目が悪いらしいが、普段はあまり眼鏡を掛けていないという変わり物。インドア系で読書が趣味らしい。野球経験はほとんどなく、運動神経もあまりよくないらしい。

青山 小助。二年。何と言うか顔にもルックスにも特徴がない。いや、この際は目立った欠点がないというべきか？部長と違い、中学まで野球をやっていたのでそれなりの経験者だという事だ。

石江 七種。一年。昨日入部届けを出して、実質今日からの参加らしい。何と言ったらいいのかわからない。鼻が痛い。とにかく痛い。頂点から平らに潰された鼻だが、何故か鼻の穴が捲れ上がっていて、鼻の穴が丸見えになり豚の鼻のようになっていて。初見は思わず吹き出してしまった。悪い事をしたとは思っている。許してくれ。彼は野球部で地元ではそこそこの名手だったらしい。それが何故こんな高校に入ってきたのかは疑問であるが。あまり深く考えても仕方がないだろう。

他にも部員が三人いるらしいが、今日は来ていないという事だ。半分幽霊のようなものらしく、ほとんど姿を見せないという話だった。

「ちょっと待てよ」

「何か質問でもあるのかい？何でも聞いてくれよ」

「五人でどうやって野球をするんだ？幽霊含めても八人しかいないじゃないか」

「甘いわね。私はマネージャーで参加できないから実質7人よ」

有紀が得意気に訂正を入れるが、全然威張れた事ではない。むしろ、非常に忌々しき事態だろうに。

「葦島は『部活部活』って言ったかもしれないけど、実はまだ同好会なんだよ。野球同好会」

「はあ」

それから、先輩達から野球部の現状について説明をもらった。

先輩の話をまとめると、部活として承認してもらうためには最低十人の部員と顧問の先生が必要だという事。去年から幽霊含めたメンバーで同好会として、活動しているという事。それまでは他の部活より圧倒的に優先順位が低い為、絶対にグラウンドでの練習は出来ないという事。だから、現在は部員集めを積極的に行っているという事。一応部員の目途は立っているらしいという事。最後に部長は掛ヶ谷先輩がやっているが、実質的には有紀が一番の権力者だという事。本人は否定していたが、まず間違いはないだろう。

これぐらいだろうか……？

そうそう。ついでに言っておくと、元が女子校なのでこれまで野球部があったような話はないらしい。とは言っても、共学になってもうすぐ二十年。男女比も校舎内にもそれらしい名残りは残っていないのだが。

「まだ四月だし今はうまくいなくても、これから新入生も増えると思うよ。きつとね」

という部長の言葉は曖昧な憶測を重ねており、如何にも自信がない姿が窺える。

「折角二人も入部してくれた事だし、たまには練習しようか？」

たまには？そんな言葉を聞くとほとんど練習していないのか？と尋ねたくなるが、これ以上野暮ったい事は気にしないことにした。

とりあえず、「甲子園目指すわよ！」なんて冗談でしか言えない

状態である事は理解できた。

4、 気に入らないのは

練習をするという事で、ジャージに着替えて部活棟を出る。一目見ればわかるが、グラウンドは満員御礼。中央を使っているのはサッカー部。その奥に女子のハンドボール部の姿が見えて、更に奥の専用コートにテニス部がいる。そして、脇の方のスペースには陸上部が陣取っていた。

こんな感じでグラウンドは他の部活が使っているので、俺達が使えそうなスペースはない。

しかし、先輩達はそんな運動場の光景には目もくれずに歩いていく。それもグラウンドとは全く違う方向へだ。

「え？ちよつと！何処行くんスか？」

石江が動揺して声を上げた。こいつが言わなかったら俺が同じ反応をしただろう。それもそのはず、二年生達は学校を出て道路を跨ぐとすぐその畑に入ってしまったのだ。

『土足で畑に侵入した生徒がいる』と言う話で無駄な全校集会が開かれた直後の事なので、こういう行動には余計に敏感になるものだ。

「ああ。大丈夫だから、早く来なって」

有紀。お前がその言い方すると、力づくでもみ消すように聞こえて余計に不安になるんだが。

「ここは家の畑だから気にしなくていいよ。今は使ってもいないしね。全校集会の件なら関係ないし」

青森先輩にそう言われると、俺達一年もようやく納得した。

今は使われていないのか畑の土は思ったよりも硬い。

先輩達が道具を出している間に、有紀が拾った木の枝で畑にダイヤモンドを描くとグラウンドの完成らしい。とは言っても所詮は畑。そこまでの広さはない訳で、ダイヤモンドを書くだけで精いっぱい。外野のスペースなんて全く確保できていなかった。

「こんな狭い場所で何するんですか？」

柵もなければネットもない。こんなところでボールを飛ばしまくったら周りの畑の迷惑になることぐらい考えなくても分かる事だ。

「主にノックかな？」

「いいツスねー」

「やる気あるねー。じゃあ、石江くんからやるつか」

「了解ツス！」

石江はグラブを手に取ると、守備位置まで駆け出していく。

先程からバットを軽く素振りしているのは有紀。ホームベースの後ろ、審判の立つ位置ぐらいの場所でミットを叩いているのが青森先輩。そして、ショートの手前位置に石江がいた。

「よっつと」

有紀がバッターボックスに入り、ボールケースを取りやすい場所にセットする。

「ちょっと、気になったんすけど、ノッカーは養島先輩ツスか？」
「そうよ。何処からボールが飛んでくると思ってるのよ？」

石江が不満そうな顔を見せると、有紀も同じような顔して返す。

「いや……まあ、何でもないツス」

「それじゃあ、いくわよ！」

石江が構えもしない内に有紀がさつさと仕掛ける。初っ端から正面の強い弾丸ライナー。おいおい。新入部員相手にそれはないだろう。相変わらず自分勝手な事をする奴だ。

だが、石江も負けていなかった。反応良くそれを止めると、素早く返球。ついでに得意気な顔もセットで。

「いいグラブさばきしてるなあ」

返されたボールをキャッチして青森先輩が感嘆の声を漏らす。流石は経験者といったところか。

「へえ、中々やるじゃない……」

それには有紀も納得しているようだ。……と思ったが、眉をひそめていてその顔は険しい。そして、なんだか目がマジになっている気がするのだが。

「次！」

打球の速度が上がる。素人目に見ても違いが分かる程の速さだ。それでも石江は素早く的確にボールを処理しては青森先輩に送って

いく。

「次！」

石江が守備位置に戻るとすぐに次の球を打つ。

「次！次ツ！次イ！まだまだあ！」

何か段々速度が上がってませんか？石江は淡々と同様の動作を繰り返しているが、その顔からは汗が溢れだし顎から地面に零れ落ちていくのがここからでも見えた。

「ちょっと、有紀ちゃん！いきなり飛ばし過ぎだよ！」

青森先輩が制止を掛けると、ムスツとした表情で睨み返してノックを続けていく。何を怒っているんだ。こいつは。

「二人ともすごいなあ……………」

俺の隣にいる部長は止めようとする様子もなく、満足そうにノックの様子を眺めていた。しかし、部長の言うとおり二人とも凄い。やはり俺が昔やっていた少年野球とは別次元の動きだったし、俺に真似しろと言っても無理だと思う。

それから淡々とノックをこなしていく。それから数分もしない内に、ケースに突っ込まれた有紀の手が止まった。どうやら、ボールがなくなっただけらしい。

「ふん。まあいいわ……………今日はこの辺で勘弁してあげる」

有紀はバットを肩に担ぎあげると、青森先輩とホームベースの間に大量に転がっているボールを拾ってケースに戻していく。これでノックは終わりのようだ。

「ありがとござった！」

石江は帽子を取って一礼するとこちらに戻ってきた。その額からは何時間の練習した後のように汗が滴り落ちている。

「あー。僕、汗っかきなんスよね」

俺の視線に気付いた石江がそんな言い訳をしたが、明らかに有紀のオーバースペースが原因だと思うのだが。

「有紀はいつもこんな感じなんですか？」

「うーん。いつもはもっと大人しいんだけどね。本気になると歯止めが効かなくなるっていうか、何て言うか」

「そうなんですか」

「でも、普通に練習しててここまでなる事は滅多になかったと思うんだけどなあ」

部長も苦笑いをしていた。

「次！葛原！」

「はいはい」

やっぱり俺もやるんだよなあ。まあ、小学校頃は結構やってた訳だし今でも人並みぐらいには動けるだろう。なんて軽い気持ちで守備につく。

「じゃあ、いくわよ」
「いつでもどうぞー」

有紀がボールを掴み取って、放り投げる。それから、バットを両手で持ち、振り抜……. かなかつた。ポテポテとした勢いのないボールが俺の前に転がって来る。それを拾い上げて、青森先輩に投げた。

何だか拍子抜けである。一応経験者なんだから、もうちょっと強くてもいいだろうに。

「素手で拾うな！ グラブを使え！」

「そんな事言われたって、あの程度なら使う必要ないだろ」

「よーし、わかつたわ！ じゃあ、本気で行くわよ！」

「え？」

今度は俺の右横をすごい速さでボールが抜けて行く。不意と付かれたとはいえ、目で追うのが精いっぱい。速さでグラブを出すことすらかなわなかった。

「ちょっと待て！ 今のは無理だろ！」

と言ってる間に次の球が飛んでくる。危ない！ マジで危ない！ 殺す気か！

「無理じゃない！ もう一度！」

今度もさつきと同じ、いや更に速い球。必死にグラブを伸ばすがやはり届かない。もう少し加減出来るのかコイツは！

「早く戻る！」

「だから無理だって！もつと取れる玉にしてくれよ！」

「やり過ぎだよ！」

「またボールがなくなるよ！」

横からも援護が入ると、有紀の動きもようやく止まる。ようやく俺も一息つけた。

「しょうがないわね。さっきの一年ならこのぐらい取れたのに」

独り言を呟いているのか、わざと聞こえるように言っているのかは分からないが先程からやたらと不機嫌な事だけは間違いなさそうだ。

「それじゃあ行くわよ」

さっきまでの熱血ぶりとは打って違って落ちて着いた感じの声。

ちょこんとバットに当てただけの玉が有紀の足元からゆっくりと縫い目がはつきり見える位の遅さで転がっていく。

「え？」

「ダッシュュ！」

左手で招き入れるような合図をしながら声を張り上げる。

「ああ、そういう……」

「ダッシュュ！」

うるせーな！聞こえてるよー！

「遅い！もう一本！」

ボールを拾ってファーストへ投げる。そこから守備位置に戻る前に有紀は声を荒げて、次の球を打っていた。

そして、嫌がらせのようにボールは有紀の足元を転がっている。どう見ても、ピッチャーかキャッチャーの取る球だろ……

「またかよ！」

文句をたれつつ前へ突っ込む。ボールを拾って、青森先輩にトスをした。

「遅い！もう一本！」

また同じような球が有紀の足元をテンテンとしていた。

取れないような打球を連続した後はこの連続である。そりゃあ、こういう処理の練習もあるんだけど、最初から連続してやることじやないだろう？ 新入部員に対してのシゴキのつもりか？ 何様だよ？

「遅い遅い！まだまだ！」

それに、先の石江があれだけビシバシと厳しいノックをした後で、前進しなけりゃならないような弱い打球ばかりを続けられたら、まるで俺が下手糞みたいじゃないか？ 俺にだってプライドぐらいあるのに。もうちょいマシなやり方があるだろ？

「もう一球！」

徐々に火の付きはじめた有紀とは裏腹に、段々とイライラを募らせていく。

「もつと走る！」

「やっつてられるか！」

更にもう一回足元に転がるボールと広いにいるだけのノック。そこで俺はグラブを地面に叩きつけてやる。

「ちよつと！」

「俺は帰るからな！」

他の部員も俺を止めようとするが振り払って学校に戻ると、さっさと着替えて帰路に着いた。

家に帰った俺を待っていたものは後悔。いや、帰り道の途中から気付いていた。

冷静になって考えてみると、怒る程の事ではなかったと思う。これじゃあ、俺の方が気の短い餓鬼みたいじゃないか。

それから、自分の部屋の窓から隣の家を見て、謝りに行こうかなんて考えたりもした。ずっと考えていた。

それでも、隣の家。有紀の家から明かりが消えるまで、ただ眺めていただけだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6148y/>

南桜高校野球部

2011年11月21日20時45分発行